平成３１年度　第５回　浜松市における文化振興のあり方検討会　議事録

日　　時：令和元年 5 月 20 日（月）午後 1 時 30 分～午後 3 時 30 分
場　　所：浜松市地域情報センター3 階　第 2 研修室
出 席 者：佐々木雅幸会長、小針由紀隆委員、笹原恵委員、杉山一成委員、久保田翠委員、桧森隆一委員、清水和宏委員、前田忍委員、和久田明弘委員、伊熊規行委員、寺田聖子委員
欠 席 者：奥中康人委員、高島知佐子委員、小杉和弘委員
報道関係：1 名（中日新聞社 1 名）
傍 聴 者：4 名
事 務 局：中村公彦市民部次長（創造都市・文化振興課長）、影山元紀副参事（創造都市・文化振興課長補佐）、幸田晃明主幹、野末桃子主任、牧野尚子、佐野美緒
概　　要：新文化振興ビジョンについて、事務局の素案を基に、委員による意見交換を行った。

議事　（１）新文化振興ビジョン案について

＜事務局から説明＞
（影山）
・「文化資源」「文化芸術資源」という言葉の使い分けについては、文化庁へ問い合わせた結果、明確な定義づけはないので、一般の方への伝わりやすさ・イメージのしやすさを意識し「文化資源」という言葉で統一したい。（芸術の部分を強めたいという意識のある場合には「文化芸術資源」を用いるが、基本的には「文化資源」を使用する。）
・資料説明

（佐々木委員長）
　只今説明されたことについて、質問・ご意見を伺いたい。
（桧森委員）
　この全体の構想を、普通の市民が見た時にどう思うだろうか、と感じた。これを読んだ市民は、「ビジョンとはどれか」と感じるのではないだろうか。ビジョンの考え方とビジョンとは異なるものだと思う。構成として、ビジョン策定の趣旨から入るというのはありがちだが、そうではなくビジョンはこれだ、というズバリそのものから入った方がわかりやすい。
　美術館、博物館、楽器博物館等について、「都市における集客核としての役割を踏まえ、市民が主体となって進めるまちづくりの・・・」とあるが、「集客核としての役割」と「市民が主体となって進めるまちづくり」というのは厳密にいうと役割が異なるものである。

13 頁の計画の推進体制についてだが、このように役割を分けることは大事だと思う。市民の役割として、「文化の担い手として」とあるが、ここはもう少し具体的に記載してもいいのではないか。

また企業については、折角これだけの企業が浜松にあるのだから、もう少しメセナ的な役割を期待する。それと併せて企業が抱え込んでいる人材も使わせてほしい、というニュアンスも取り入れた方がいい。

（佐々木）

ビジョンというもののコアなところはどこか、という記載が必要。いわゆる市民向けのものを、概要版として作成した方が良いだろう。見開き１枚で示すようなかたちであればいいのではないか。

（影山）

昨今の市のビジョンや計画は、文章化したものは解説書であり、最終的には１枚で市民の方にわかりやすく作るという方向で進めている。これらのエッセンスを要約したものを作成したいと思う。

（佐々木）

集客核とまちづくりの違いについてはどうか。

（影山）

確かに違うものだと思う。集客核があったほうがまちづくりを進めやすいと考えている。集客核があることによる周辺への波及効果、賑わい創出の影響を踏まえて、まちづくりを考えることになる。集客核とまちづくりの主体は異なるが、両者が連携することで相乗効果が生み出せるといったことを表現したかったが、うまく表現できていないようなので改めて考えたい。

（清水）

この文化振興ビジョンを読んだときに、１０年後の浜松市がありたい姿、どういう位置づけで文化が振興されているのか、あるいは市民からどう理解されているか、どういう風になっていたいか、ということがわかりにくい。

鴨江アートセンターで活動する団体や吹奏楽活動をしているような、そこに携わるコミュニティには意味があるのかもしれないけれど、１０年後の浜松がありたい姿としては、浜松市全体、市民の皆さんが音楽都市・浜松に住んでいるという実感をもてるということではないかと思う。

１０年後、一般市民がみんな「音楽の街・浜松」にいるのだという視点が必要なのではないか。

（佐々木）

８頁の下の囲みには示されているが、より分かりやすい書きぶりが望ましい。

（影山）

ご指摘のように 8 頁に記載したような１０年後であってほしいという思いを込めたが、

それがうまく伝わらないのでは問題がある。図や写真を引用し、伝わるようにしていきたい。

（清水）

市が取り組んでいることが分からない市民が大半なので、こういうことをやろうとしているというのが伝わるようなものが必要だと思う。

（影山）

表現の仕方、伝え方についても仕掛けや工夫をしていくことが課題である。最終的には市民に伝わるようなものにしていきたいと思う。

（久保田）

非常に誠実なつくりかたのビジョンだと思う。読み込んでいけば様々な要素がちりばめられている。ただ、私個人の解釈としては今まで、ある意味ハコモノ、大きな事業にお金をつぎ込んできたけれども、そうではなく、すでにハコもたくさんあり、アーツカウンシル的なものが立ち上がったので、それを今度はどう市民が連携させて動かしていくのか、どう活用していくのかを期待している。行政がぐいぐいひっぱっていくという書き方ではなく、いろんなものがすでにあるので、それをどう活用していくのか、ということを問いかけるもののような気がする。

このビジョンの中には、こうして進めていきましょう、というのが示されていない。ただ、それは見つかりようがない、市役所の中では無理だろう、という感じがする。

むしろ、もっと市民に議論の場を用意し、みんなで考えていく場があった方がいいのではないか。みんな、というのも抽象的ではあるが、この問題はどこの自治体も抱えている問題だと思う。

これから経済は発展しない、だけどハコはたくさん持っている、だから文化政策。そういうところにつぎ込んだ税金が多すぎる。行政がお金をつぎ込んで動かすということよりも、市民がどのように使うのかを検討する必要があり、もう少し議論の場を設けていった方が良い。大きい場ではなく、小さく小さく何年間も色々な議論の場を用意していって、みんなで考えていく、といったことをやっていけたら新しいのではないかと思う。

創造都市、という視点から行くと、文化政策、というところだけでできることではないので、障害福祉、中心市街地、商業政策等と連携しながら文化的なものを入れ込んでいく必要があると思う。

ただ、浜松市ではなかなか庁内を横断して作り上げていくことが難しいようなので、市民から声を上げて動かしていくことができればユニークであると思う。

（佐々木）

このビジョンは誠実に、隙なく作っているが、ダイナミズムがない。名古屋市では各地区ごとに文化商工会があり、それをどう再編するかでもめたことがあった。

今回、浜松市でも区など代表的なエリアで、ビジョンの原案に対してそれぞれから意見をもらうのはどうだろうか。市民の生の声を地域ごとに拾うというのは、大変だけれど面

白いと思う。
　市民に、何がどこまで来ているか、というビジョンを示しながら意見を聞く。手分けして様々なところから意見を聞くのがいいと思うが、汗をかく時間が取れるかどうか。
（和久田）
　ビジョンだからかもしれないが、お金のことが触れられていない。しかし、お金がなければ何もできない。行政にお金が無くなってきている中で、どうやって民間の知恵やお金を活用していくのかという方向を示していくのもビジョンではないかと思う。
　また施設については、民間団体もホール的なものを持っている。公の施設も民間の施設もうまく使いながら、というような内容がない。
　ホールの機能分担・役割分担についても、我々は管理していく中で文化コミュニティセンター、壬生ホールなどを地域施設と思って運営していない。アクトでやっていた事業をそちらの地域に持っていく等しており、そういうところにいかにお客さんを持っていくかという工夫が大切なのではないか。ここに文化施設の役割がそれぞれ示されてはいるが、それだけではないのではないかなと思う。
　全体の話としては、行政がこうしたい、という考え方に偏っている。市が事業をやる必要性はないと思う。ただ、公の施設は市が整備しなければならないと思うし、その使い方をどうしたいかというのは示していかなければならないところだとは思う。
　市民の人がこれを見たときにどう思うかという視点から、１０年間やってみてここができた、ここができなかったというようなものを、別バージョンのものでもいいので、その点に関してわかるように示してあげるというのも必要ではないか。
（佐々木）
　１４、１５頁の中で、文化施設の役割分担が書かれているが、そのネットワークの記載がない。それぞれの役割を持った施設の連携を全体として捉えることが必要ではないか。
　政府は、この４月から外国人労働力を入れると決めた。なので、都市部で人口が減ることはない。日本語を話す人口は減るかもしれないが、どんどんグローバル化が進んでいって、ある程度の人口を維持していく社会が想定される。そうしたときに、何が大切かということをしっかりと考えた方が良い。
　10 年のビジョンであるならば、こうした社会が想定される際に創造文化にはどのような問題が生まれるのかということを先取り的に考えていく方がよい。人口減少化社会だからと言ってカットしていく、という考え方ではよくない。
　社会の変化、ＡＩの進化、子供のころからＡＩになじんでいる、高齢者がもっと文化で元気になる、ということもあるだろう。この議論をはじめた当初は、政府は方針をあきらかにしていなかった。先進国において、人口減少社会を想定している国（日本）は稀である。先進国は大体、足りなくなったら入れる、ということをしてきて、その中で多文化共生だとか、社会保障といったことが言われていく。
　浜松は多文化共生の先進都市であるが、そこでどのように文化というものをとらえてい

くのか、ということかなと思う。柱は間違っていないので、ウエイトの置き方を考えるべき。

（前田）

９頁から基本方針があり、基本目標、基本施策が記載されているが、その後の計画の推進の部分で、計画の定義がよくわからないので、言葉の使い方の整理が必要かなと思う。

実際に施策を推進するにあたって何をするのかという１３頁がぼやけているように感じる。市民、市、財団、大学、企業とその人たちに求められている機能や役割はよく分かるが、その人たちの力を使ってどうするか、というところまで掘り下げる必要があるのではないか。

推進体制とは、こういう人たちとともに、こういう体制を作って推進していきますということ。例えば、戦略会議の下にワーキンググループを設置する。そのワーキンググループは７つある。そのワーキンググループの中に、大学がいたり企業がいたり農協がいたり、そういった方々に、毎月１回、ワーキングで売り上げが出た事業に関して計画を進めていく。例えばその対象には市民も入るかもしれない。

こういった政策を具現化するための体制を明確にしておかないと、実際に誰がやるのか、行政なのか民間主導なのか目に見えてこないと思う。誰が進めていくのか、というところを掘り下げて進めていただきたい。

組織のハブになるのは財団なのか、さらに細かい部分はアーツカウンシルなのか。そういったところを明確にコミットメントした方が市民の理解を得られるのではないか。

（影山）

計画という言葉は唐突すぎるので改めたい。

個別の推進体制については、実施計画で体制を明確にすることは事業を進めていく上では非常に重要なことだと考えている。今回ビジョンとして示す中で、やや具体的な事業に関する記述を薄くしている。その中でも施策の推進体制をどのように進めるか、どのように体制を示すかというところで、明確にしていく部分と考えている。

今回示した中で、誰がハブになるのか、という点では誰もがハブになりうる。まず市民が主役であることは間違いないので市民を一番においた。主役である市民が活動しやすい環境を整備する、関係の人たちをつなぐのが市の役割と考えている。文化事業の実施主体として財団、そこに力をあたえる存在としての大学、企業。わかりやすい図にしたいが、どう表現したらいいのかについては考えていきたい。

（佐々木）

文化振興財団の話が出たがどうか。

（和久田）

これまでの歴史としては、基本的には市が方向性、予算を決め、先導してやってきた。音楽中心で市が進めてきたということもあり、それ以外の部分は弱いと感じる。本当にやっていくのであれば、人材面も含め、腰を据えてやらないといけないと思う。

（佐々木）
　メリハリをつけた推進体制についてどこまで、どのように明記するのか。市民の団体などは、鴨江アートセンター等、施設の利用団体といったものを羅列していくのが良いのか、もう少し検討する必要がある。
（笹原）
　令和となって年号を数えるのが難しくなるので、できれば西暦・和暦合わせた表記にしていただきたい。
　今回、配付された文化振興ビジョン案の資料は、現在の文化振興ビジョンと比べて薄く感じるが、ここから厚くなるのか。
　お行儀のよい政策になっていて、行政文書的に感じる。文化の多様性がぶつかるところで、偶然性、何が起こるかわからないという、ある種の化学反応が起こっていくというような不確定な要素があると思うが、それをもう少し書き込んでもいいのではないか。
　また、「市民は、様々な文化～」と書かれているが、「市民」と一言で表現されていることにも疑問を感じる。市民は多様である、という意識をもって書くべきであるし、「様々な」と書かれている割に多様性という感じがしない。書きぶりもあると思うが、やはりより具体的な市民や文化の多様性について、具体的に行われているものの例示を出しながら進めていった方がよいと思う。
　「文化」という概念についても、従来の文化の枠をあまり超えていないように思う（若者のポップカルチャーや民俗文化、食文化なども文化であるという議論がこの委員会であったと思うが）。
　より具体的な記述の中で文化のグローバル化が想定されているように見せる必要がある。
　市民についても、市民と一言で書いてあるけれどもグローバルな市民が想定されているように読めないし、浜松が合併を繰り返しながら農村部や北遠を含む多様な地域であるということを盛り込まないと、市民という一言では片づけられないと思う。浜松市のそれぞれの地域にいるそれぞれの市民、といった表現が必要なのではないか。シンプルに作ることも大切だが、複雑なものは複雑に表現しないと多様性が表現できないという印象を受ける。
　シンプルであるがゆえにそういった具体的な部分が落ちているように思う。残すべきところは残していき、プラスで加えていくという考え方が必要なように思う。
（影山）
　全体の分量についてはやや加筆していくが、以前のものが全 36 頁で文字が大きいこともあり、挿絵やグラフを入れると、現行のものでもそれなりの分量になると思われる。
　前回の文化振興ビジョンについても、方向性としては踏襲できるものがかなりあるので時代背景とともに加えるべき要素を反映させたい。
具体的な記述に関して、多様性をどう表現していくかは難しい。具体的なご意見があれば伺いたいと思う。

（桧森）
　浜松には実際に駅前で踊るブラジル人の若者や横尾歌舞伎の演者の学生はいるがビジョンの中ではすべて市民と表現される。これらをどう表現するかと言えば、写真やコラムなどで、特徴的なアートシーンとして見せることになる。
（影山）
　コラムは他都市でも取り入れており、良いことだと思っている。例えば、委員の皆様にコラムをお願いできるか？
（佐々木）
　そういったやり方も一つであるし、ワークショップをやるという方法もある。
（影山）
　写真などビジュアルで見せ、わかりやすくする方法は取り入れたいと思う。素材もあれば提供いただきたい。
（久保田）
　みんなのはままつ創造プロジェクトの採択されたものをタイトルだけでも羅列していくと、浜松の多様な、ユニークな部分がみえてくると思う。芸術祭やビッグイベントが当たり前のように行われているが、そうではなく、浜松市は市民提案でやってきたというのをもっと見せた方がいい。
　市民が主体となって、考えてやってきたという方向性を明記してしまってもいいのではないかと思う。
（寺田）
　市としては、外国人労働者やグローバル社会について、話し合いをした中では、様々な方が様々なアイデアを持っているが一歩踏み出せないのではないかと考えている。単発の花火のような事業ではなく、市民が主体となった小さな事業が絶えることなく様々なところで起こっているという状態を望んでいる。
　市民というところに企業を内包することも考えたが、あえて別に企業を出した。というのも、企業というのも浜松の特徴的な部分であり、その企業の人材が文化にどうかかわっていくかを考えたからである。
　様々なアイデアがどう形になっていくのか、不確実な要素がありながらも希望が見えてくるような推進体制・中身にしていきたい。市民の方が、どのような形で実現していくのか、長期的な意見交換を重要視しながら作っていくということを盛り込んでいきたい。
（佐々木）
　みんなが集まるプラットフォームを作る、そのために何をやる、ということが明記されていない。
（桧森）
　大切なことは、一文にもならないことを一生懸命やろうというような人たちがいるということ、自分たちがやりたいことをやるんだ、というその熱意。そういった思いが明記さ

れていないと思う。
（小針）
　共生型社会を目指す都市という文言がある。日本というのは共生に対して寛容的な一面をもっており、協働や共生が多用される。
　本当の意味での共生とは何か。浜松には日本人も外国人もいる。仕事を見つけて収入を得て生活も安定しているというが、それだけでは満足しない。文化・芸術の創造、そしてそれを享受する、楽しむというのが人間の特権である。
　その人間の特権をどういうときに味わえるか。それは、驚き・驚異体験である。常識を覆すことを提示されたときに驚く。しかし、今回提示されたビジョン案にはそれが見いだせない。
　例えば、８頁に「文化で市民の幸せを創り出す」とあるが、突き刺さるような何か、マーベラスな体験を市民がしていこうじゃないか、といった記載がほしい。
（伊熊）
　ビジョンや計画については、書きすぎて将来それに縛られるようなことがないようにしていただければと思う。
（杉山）
　市民がこれを見たときに、こうなっていく、ということが見えにくいように思う。要するにどういう風に変わるか？ということが見えない。
（佐々木）
　そろそろ仕上げの時期に差し掛かっている。検討会だけでなく、それぞれ委員に話を聞くのもいいと思う。
　１０年前ビジョンを策定し、創造都市・浜松の基本計画を立てるときに尖ったことをやろうとして進めてきた。結果としてユネスコの創造都市ネットワークに加盟、新しい時期に入った。自分はそうした背景もわかっているので、ここに書いてあることは分かるけれども、１０年前のことを思い出せる人は少ないので、過去のことにも少しは触れてもいいのではないか。
　浜松市は世界的な楽器メーカーが揃っており、新しいテクノロジーやミュージックがあることころは珍しい。色々なエピソードをコラムにして載せていくのはいいと思う。
（桧森）
　８頁の四角い枠で囲まれた部分について、「楽しむ」という記載が、享受するだけというような印象を受けるので、「創り楽しむ」というニュアンスが伝わるような記載にした方がいいと思う。
（佐々木）
　浜松にはものづくりのベースがある。創造の部分をもっと出した方が良い。
（影山）
　ここに関しては鑑賞と活動と両方の意味を込めつつ、タイトルを短くしたいという意図

でこのような表現にしたが、伝わらなければ意味がないので、再度表現を検討する。
（佐々木）
　大切なところは長くなっても表記した方が良い。

<終了>

■今後のスケジュール
　８月にパブリック・コメントを実施することを踏まえ、次回委員会は７月８日(月)で開催したい。